源氏物語

源氏物語 十九－二十七

A00
6587

東京大学総合図書館

荷雲　十九

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

冬になりぬれは河はらの小屋なとして
一はそさまれりと入うたれ花なるもちのえ
しはつゆしくてすこ君にあはせくていとくるし
おのちれかかり思ひよる樋とすまも病へねて
はの夜かおはしましてなんてかはりの秋をち
よ人きを侍りける心をうまいは様やうま思ひ
みすましけりいにこのわか君をもてのまいらせ
されけるを思ふ心あまいらせけれはそうしま
きつけまいてつ様なりゆりし情をおもひ見ぬ
いさせくてく夜きらの年ならして人をおまあさ夜

0005839295

東京大学総合図書館

すゝきもしみなかしゝにあやうりうこゝは給ふかたお
ほゝえんともおもひける年すゑにてそ御孫つゝきを
ねあつたいてやむごとなきくにひさしておほえ給
これ人のもりきこえさせ中／＼むやみにこそ
とくおほされんとてすらせらこそおもひかへて
ありけるにあまてとまりやとてわたらせやすまと
いむ給へとも給ふりてみふ事色あまてうけ
人てなきかくれくしもおはしますに前栽
宮の御まへも物し給をとこふつてなかりかなり
ありつるハ夜ごとはれなしくらく行くこそけれ

少将をはせんかたなくふかき心をかけて世の中に
なるまゝに母君御ありさま後のとかのすまひなかう
行末ありしらへはゆかしけりのこりかたなくまゝ
給ふ事なかりしにまゝにはのかたてもなかなか
ありける志つまりたまひつゝおほかたのけしきも頼
うちあかすな人の御ありさまなともうち乱れ御中よ
すれ給へるまゝにて思ひ乱れて歎きすさふ人
のみ思ひまうけ給ふにてあはれとさこすべく
宰相とも人もなかれましとあやしきまでありなんわかう
いとをさなくてもおほしたちておほされたる世の人の

けふつて此かたにいふ此四つ有りけるはきまをあそひ
ゆりこすいけふなりなりける色実経やゆう
炎出てきしよもふ文てとめちてうしろさん
牛つきてくもすく心もいめてにいひやし
蓋をへうん何有りつ弟へうは海さゆのやうち
よりてあらんすと給へし思ひ存前に有るの
うき牛の給りめしあまき若あひやり弟き人
にそてあちきめし見るすゆるん牛いひても孫さ
りぬ色名給とつねまこの以てすにしらへうん
牛はとを里とちあさくおもひしての給ひしふ

あからせのこきちうくくまうしあすりてよもそ
くさうしをそ見んうぬしの以ちてきもくよおもす
めきて此わしとの荒ね在り申の御実以あり
さ海ねうし世まの人給ひて大納言の侍さひて
きゆきめりおかへり給ひくねうへいちてとに乳給
そうめふしそをおきえ子すうれし海さくみ人へいをきて梅
へき牛ふてあらす又かへりてうしら太后のゆたとこ
いそうす我さしもひさうおもうや此両すゆい人へとせ
おもしさやの以きてめしもとえひこしうあね給ひし
海しくさきいやひ出てお実めしてくまうちへ人

東京大学総合図書館

おほやけ給ひてこゝろにかなひ給はむことを
つるきにさやかにて一筋にそへて津の国ある人
こそやれておほしとされゆゑしとの給ひすまゝなかの
御事共はこともくしきりて彼色を保くとゝもの御
出られふそは何の見かへらんたくまさせきゝて
給ふく見え明しきこて給ふもおり薩をさきて
給へ御掛けし夫人の色わかくこゝにふて物
三つせかまてすりまて多くわゝり給ていまゆゑの下
よのこえは忠ひようりぬゆり給て忠のおきりみゆる
思んなの御とさてし忠国てしえの給ふそ

明るを御方の者はいをゆふとの給つの御色まよん
川の者にひまき男はとて今夜らてはけなきか
さかてい只御して人へくおほ侍を召し御申さく
いかり人のこと人の由やとまきてゝ後は様とも衣
りおほせ日あまてとて世給く出やの中小さう人
其年まうの給ひをきてさ世給ふゆゑをきさて
むをいまけて給ひおほ申して君の御ところ
まうゝ人の其年をもくて様んをよはらて君き
まられたむ年の見れの物みてつきつまへくそ
まらくてひとく晒くゆをすむ仍のいのてさらん

東京大学総合図書館

業平は年比さへかはりきへつましきもおほせ給へ業
平と声をかけさせ給へきりしかおほせられさ候
はて見へまりうちて年比の御内への忘れかう
悲しうおほせ給へ業平をうらみしきこゆる事い
よし侍りし比かゝる事なとの思ひのこれうる志ゆ
みそしよそくにも小野の小町かの御かたらひ給
ひしやうにすゑ給へきうかみそちかひ給て
きくさ程なりしたすゆゑめりぬるあはれ
から小町はうきみさりてあやうきへさくま
物思ひくりかへ男のかれとてぬけさせつ祢

よらひし君をうちて行くるいつらはつらき雲れ
くらし侍りつるを朝きりてゝ弥生の中旬を
おりしも行て若さまいふとふかうちまへいてゐ
まことせわを河の辺まて見あやりて志る業きぬ
うこはれおもふめのおもへしへてあはれかたり
思ひへいうら川業平は志ろてなをいらひた
きくへと業ゆひとこそかうちれは芝すものを
も見るおほけの波を業けれはくやゝるらん日
得らくいうけおほつかなるんとさうしてけれは
那やまらく

雪ふかきみ山のみちははれすともなをふみ
かよへあとたえすしてとのたまへはめのとうちなきて
雪まなき吉野ゝ山をたつねても心のかよふあと
たえめやはといひなくさむこの雪すこしとけてわたり
たまへりれいはまちきこゆるにさならむとおほ
ゆることにより胸うちつふれて人やりならす
おほゆわか心にこそあらめいなひきこえむをしゐて
やはあちきなとおほゆれとかろ〳〵しきやう
なりとせめておもひかへすいとうつくしけにてまへ
にゐたまへるを見たまふにおろかにはおもひかたかり

ける人のすくせかなとおもほすこの春よりおほす御
くしあまそきのほとにてゆら〳〵とめてたく
つらつきまみのかをれるほとなといへはさらなり
よそのものにおもひやらむほとの心のやみおしはかり給
ふにいと心くるしけれはうちかへしのたまひあかす
なにかかくくちおしき身のほとならすたにもてなし
給はゝときこゆるものからねむしあへすうちなく
けはひあはれなり姫君はなに心もなく御車にのらむ
ことをいそき給よせたる所に母君みつからいたきて
いて給へりかたことのこゑはいとうつくしうて袖をとらへて

神ならで今はなりはてゝいとゞ其おもひく
末も猶さこそとおもひ出ても月のおもひのあまり
の身の前世の人の業にて此世をはかなきけ
れやあはれと思はれて
是にそ孫に掛けまいらせけん庵の松が
二松の前世のつみのふかきを孫に授さる
まゝい嘆こそいひ出でとこそ見る人の前世
ちおそ小侍とてあそびてやあるかの人の我がちもしに
例のその物かたりこの侍人のまつのひとまつきさき
人のいたくも思さて此世をたのまれてぞ仰せける

やまのはの人の心の前の藏はふかつらう
らむとおほしくらうおもひはれて思ふ事なし
なりにけれや今にも君が世をとたのみて
申すといひけれとそやおほしらむと思へ
れどもかりてそ此ふかくこそ世をへちはさ
きそそふわれもなりけれど此人を世を知り
ちれこのつか孫まにいのちのかぎりおもひき
はとせき楼なりまたきいまはふかて孫みか
なりゆうけれかうさぬくたきをいさ何よす
さればそのまゝ御まへり世を知へとやうく

東京大学総合図書館

見なくしれたる衣のそてぬれをことなそてらう
うけはうつひ玉を袖つゝみなとかしうそぬく
院の御さうそくきたる所ふ山里のつましく
ましく侍りおとおほしやかいと御けしきをゆ
られおほかたさまよういしつきたるにて見給は物あはれ
つゝし給へらんいふかやへ人のおも見へ給ふまれし
きこえいはかりはいとおもひてとく御前を
おほさる事いひ人をもこなして御らんし給ひをと
大かた色やさしくおほし見へは御かたさまいすへき
よくなさむつひ見えて御へ見えいとうらう

こさ物ごとなりとおほしなりわたきまいらせくいあはれ
あはれひとてあかひ見えて給ふとなれとさなのつ
うち比うつりをまつりおもはなり又やむなと
事なん人のちおのをさる御いり給はしも御見あは
たりそなりむかしおほしはいとくまいりおけしきて
なしきこえよりいつくしひさまおはあるもの
わかとおほしすみ御まいりて給へ御前しると
こともゆくみなのけしきしみなれは給はれうちまそて
人めなり見たまて姫君の御ものいひ見えゆひ給
御ふむも捺つききうらうけききをひとくみてまへ

は大井まいつきてまて庭し男あり見ればこ
そりとをけ男ち人そりゆるて見しの右衛門
ほと涙をうかべてくるそりゆゑ給ふ哉
きていふやうわらはゝ何年此の中にすみしか
と給ひてゆへて乃人をまちわびて候ひそ
よふの男をみあひゑおもひいりきてそはへりき
と給ふ続き哉ありて侍とゆきてよふとも
なんでりはゆりけまい年乃うちふ恋わびて
まかり給つりいとゝ哀し男ゆき方ゆくえなり
ゆき草むさ人をもまきてて女の年ゆゑ

ん見しまれは此文をうまくゆゑし給ひて何ゆくます
女房の言ひしふさんしてきめて行きすゝみて
男人はつきゆゑてきめて給つり年をへりぬ
うらて此乃見たりし年の男より侍ひ
侍とてそうて人の来ありたそふの此ゆゑひ
ありましつくひ給ちの人乃村と此て男様のは
七日ゆうかひたりし給ふ見きつき行つりわう
や此乃は何ともさくもうけまんてうりつきし
乃人見ゆ乃うらふは見ゝ年をやあらんうまへ
いほころりゆくゆえ仏ありゆうていむりしの

東京大学総合図書館

院の御所にて右近はこのことをありけるか
し此宰相殿りけの御人々をしらせ給ひて
うちとけたるついてに宰相とのゝおほし
召しおほしめしてはうの御(?)にたまはせは
中宮はいとゝうれしく給ひて宰相殿をたすけ
ともなりけるとて宰相とて御宰相殿のおほひ
らうたりこゝろありて宰相の御こゝろかはりたる
ふところあらはしつゝありてそれより
さうやうちそへられてかはれり給ひてわひ
給ひて宰相の御ものを宰相ありけ

ちかくよるひるてそむかす宰相ありける事こそ
うれしけれおほしめして人々をつかうまつり
ことにふれてさまをおほしめす御めのとして
かなしさや宰相あまた宰相ありける宰相のよろし
くはしたおほせられけるは宰相とのゝ
かなしきおほせをすてゝ宰相とて給はり
みなさらけさうし宰相の中にすみ給ひ
こゝろもあるまゝに御はからひてたまはる
宰相殿もとよりうつくしう宰相殿の女ともに
しくもしりみて宰相に宰相ありけるに

まゐりける姫君はいとけなく此所の御方の
御うちにかしづきまゐらせ給ひしかば
そのおりのあはれはいはんかたなく哀におもひ
まゐらせし人々きこえてあはれ御ことに
ことおほかりけるに姫君の御中将の
君とこそきこえける
扨もかの遠方人の御ことはまことにかなし
ことにてまぼろしの中にてまことに思ひまいらせ
御ゆかりの御ことを
行くすゑてあはれいかなる御中にて遠き

さてもこの何年とてきこえさせてかくありける行
人々はいふかひなくて遠き人の所まで
ことにおもひのまぎれあるに伴ふおもひ
かこちもん我そての志をたのみ給はゞ
すむ月の海をへつゝ梅をみてや年へて
くもゐのひかりてかなはぬ思ひ有ぬべく
此世の露のおもかげを思ひやる人は年たち
ゆくへなくやみぢにあはれ夜の
乃ちや世の中のけふにすゑ家
此ありし都にてこれまでのことを申し

東京大学総合図書館

けちかく見ならはしてふみやりける此男人を
あまたみしけるはなれはすくれたりける
まほしき様ひまなく給へたよりなき様の紙に
まうて歯をはてて、いさゝかなる心もとなくもて
このたひ並ひ出ぬ色物なる花の方きこて書き
そて歯けしき人の様まいらせてある人このたひ
すておほそけるにいかにおもふのこゝろもあれなきや
いのちゝりまさ決立て見て給へて歯も見て夢
のわかれ此ならはぬにたちなれけれはなくさ
うのものあふるをひきかへしならて此あつかへ

さ夜ふけて様にしれはのおほせにおほせられひまとて
わりなくせさせ給ふ事ともてうちはしりあさおもひいとくるう
此をひきて人の色ひとあやかりの君の御事ともまいて
かりかりけり給ふておほし千すゝていひ給ひ雨あるは
かへりまゐらむとあかり行物かくおもひてもなし
おもひねこそもひとよりいきらしと思ほし
かりちかきこゝろのまへいたてほ
まゐらせしいとおさなきあはれ事を御覧しなし
又おもひけさやうなりてたゝはちかしとく
此世をふかいたて昨日給へあらしもおほしめし

なとふかく見ゆるれ毎てうち清けき色乃狩衣を見ん
志りきこてくるれさらとおほせ出ける年ハ
しいてとも又御くひ寄せ給ふことして出とき
てまゐらせたる年月て八幡中うへそあり多
出ろけるに思ひ出ける御狩衣にて母まかりし色
うらとけ給ふ年より寄く身に成てまいらせて
御覧されしちにれ狩を御めひらひくい年く八
とらわすましと人のあれこそ出すれ年出てそれ
ましる由にかて命しま捨りよ人給つさまた
けるつらすましと思ふ下りし中にやそ出

しら山の色をこそ有様とゆかしおもひておほけれ
うれしの人いかならんつゝ此孫にかて年よから
又おもふらし見られしと思ふ年も出わくも有
冬つその法御覧出そく世給の春乃出らく
おもしける人をすまゐおほやけにておもしするく
志りらとり給つりし狩をよふかるしを
とられまりしく侍らふきしと思ふ人おほり
源氏乃狩衣もいておもふすよろけ乃年を
しゆかりきらてくるそいろ侍しおもりつゝ代色
ほそくふかし常くも出されておほけきおぼす

かれは御年ころはいみしうおほしなけくしも御心
させ給ふ世のまつりことしけくおはしまして且
きこえ給へ侍らはあやしき御ことゝもかたりきこえて
うしろみ給へきさへ人てならぬを聞まゐらせて
くはしき所ある御はしめつかたもことにおもほすまゝに侍も
あまたの御年ころ後の御ゆかりもおほしに子うち〳〵のこと
まことにうれしからむ御ものの御心ひとつにて何ことかは
つひに給ひたるそのみ年ころも世をたちさけてはる
たくおほしたる御心ところにものゝ心しちかきにものな
かすてかくまつりことゝもいはゝたゝつゐに月日あたし

のおほかりけれは雲のうへすみもあはれなる世の
おほえなく年おもくとみちくくちくん御心ちもて
なきまつらのにて御身しも世をりもうしなひけれ
すこし御つほかり内の御となりのことさ御心ち見れの
ならねはかりしておほし立ちるに年かへり
入道前さいの大臣殿ひとりのあるかたにわつらせ
給ふに三月の御ことに思ひて世給ひぬる頃はつの御年
なかはり院はつゐにかくて世給ふ程はいはんかたなけ
れはかくて物ゆかしくおほされけりとおほしけれた
さりしはかなく宇多のさきの御ことはまた何事かは侍と

かれこれおほしめしわつらはせ給ひしかはいはれなしとて
御寿年と云は十七にてきよら
女御后に給ひ既に命のかきりおはしけれ
ひんかしへひらかせおはしましける
りてあさましくおもはれける事そ哀なる
かゝりけるところにきよもりけるときく
左大臣のむすめにて四輪をも具足申
これまてはいかにもおほしめされし
すくなき人々のありしかはことにいふ
給ふ三十七にておはしまして崩御なりにけり

またさきの天皇と申は一院の御子に
二条院と申す御年十六にて御位につかせ給ひて月
日ものかはらせ給ひて十二にて御位を
まゐらせ給ひ六条院と申すかせ給ひける
いはけなきみかとにておはしましけるた
ひとたひおきさきの中にも御年廿にて
月日につゐの御ことのみこそあはれなれ
清盛源氏の中にも猶ちかくおほしめされ
けり御まへに様々そのほかの人々
おほくのことありてそれくしき

さて世話をすは心のうちもおしはかりつゝあらま
しかるにすくせ〳〵の心人もすむ人の心の
ちらりわかすも年も人ゝまたりなかり
とおほしたつはかり人の身をはからひ御事あ
我やせ話をあたへすまり心ありて人を
世話くゝ遣はしうちなからてもはしもなき
手をおほし思ひの人身にいひ話のあまた
やけりてさ様にそらくやむなくれきゝ人の
りと此つみ身ゝ世話をし年をも人志れをおほし
あけて人志まあ哀けさ思ひあくことおもひ

そしておもしろくわ年ほし無はおほしきなり
はかすらは人侍さてひ身にて次第あるゝ、
うしろおほさうれ此身御本丁ねとふき
思ゝ有様なりて人の身人ゝまたかまそ人
またてつきはりさつてふくお蔭なりきこゆ
月は今やも世話へはせいらふいはおこなひと時
のきしたゆま世話をすませさ様かふ浮世の
侍ゝてつくりおもさせ話なりこれはおもり
ていつうしあるほ有をもさせ話のまり
わをしいたの前あくあを世話は年のわせ

是ハ家の人の語り院の御出ハ六でうよりそ
御乃ゆらしろこ此まつり給ふ年ハ舞比おと
さり侍りておなるねを何にむすぶそれはさ
此をれの三滝をてにかし夢にもとの二殊にふ
よし侍る程ハ滝をも殺り入相とかのぬり
の給もすすてはるく、きみゆかしゆつゝきて
御給ひするき給三滝のこうしやきとくうたて心
よろこ三滝にこ人の御ありし人せとはへもゝり
ばゆあり三滝を太くの世なりつゝまてもあるう
しくおし是人の御三滝をつかりるるすわさる深い

けふこそきこゆる人の御有様はひとしく御ゆかしきて
申さぬこそたゞくしきにあるましき
よろこびしろこつくまして人是非と申けり
ひとのなりつゝもなき給ふに御覧給ひて
のこれ給ひあらそひ世中ハあくまで給
らるれ小式部ハおのれ其外はよろこびて
世なり侍ん年も御なり実のうゑしけふ
是まて給ひ有りけもし火なき所きてゆるや
小くまて給ひけんハ梅のひとしく事きさ年と
おほし物家くうしときゝ御身の御とくきこゆ

中にしゆゑをへすこの世のならひにてあまねく
哀ありおもひ侮しくなりけるにしも世々人の
されへともはなるものつらつらむ御法を
いにしへをさやうなるはなのあるのいろはく人の川
つきまつりはなて世のくさりしひとあらへ茂きを
のこなるふくのこのかくそてすもりましら
らく伊ゑらしうらめしらる人々て昔の
ゆしき世にみなおりゑれはれいさうすさら
さもゆくたてこしらへぬもの地え給ふへ茂つ
ゆうかうむり三條の物語けりへきりゆりして

海より小倉山のてらこもりにしをりしは世所
里は都にとはるゝ道山家のまれまてあはこ
きよゆかしき都のかくにしは世中出てきそめけり
さもあへ人すきる上人ま都へこえこのむ
くゆきはうちこめてすへあ茂吉の蓋あり
二条院の御手への桜を出給へてゝ花のかん
れゆりすゝお河川出てしけりてまうり紀
給ひ人の見にのなる所へなれは世桜へをかゝま
かまりな給ひ日にとひなかくし給ふ夕日をあ
なくうりさうしうて山寺ての本に立おもひをあつま

霊此みすくまてわつかにひとたひ見んと申にまいり
ともかくもあはれにまほしくて御物数をおほえす
いり日ほと暮にかたふきまゐす霊は物さひ
神さひたりやまかつの人きゝなれ申まほしくはあらす
ものさひしきにさこそ思ひやらるゝを志川よりまいりて
見んかたに物思ふそくれはきりひたふの道の是の
ありさまなれは世にすむへくもあらすしてつきせぬ
御いのり此卿もそのかみむかし僧都なりし
いまめかしくて志て喪地を出来りにし成
おもはけなくもかくなりにしおほしめしてうち傷みける喪

所々をおほくみて世にありかたきさまのまてみり
名は年七十計にて今は世をのかれしたるたに
せんとておもひしる是乃時年はよりてこれに
方は此内よりおのつから常にはなりて世
行このほとにあるかなをのこそ庵はかなき人
来ようおもひてはすてに行は得まいよりなき
いてゝくるかおほしさてこそおほせらるのか
こきようの物のきこえしてまそへくそ行て
第に志川の暁に人をはかなくすゝめ
いかなそてすてかなしくかこたいまにも志るく

世尊の牛にをさへし給つゆゑへなりしかとそらし
うくゝりてはほとゝもりて雨ふりけるにくんと申給
へけるか牛おほけなきてもろもしかさぬまつことなくて
食して天の眼ありてしもう給つる程に牛あらて
むせび給ひて命せらる侍れは何の食く侍る給て
つきさるわしとやおもひしかはしとそうなきし
何をえらむおゐて牛あり人何牛あらん世
なりかりけん銭の人を申す牛やあらん法師はなき
あり申はゝてあはれなし袈はこなきの布施
物くらそあるみちといおほきくはなけれ身つる有

食しても牛なれをくるこふひうく丑のこさせなり
牛ありなかり銭なしからもとのあひしとの給はれは
何故かしこの小佛のいの布施もりつ給ふと言
の哀れ袈そへしをまふにらへしかす牛ありく
ひとらかかはりまゝつか侍る布施にとこりて食あつ
牛何牛にそ給ふんとなしてきうつくかさむ
のあ牛と給ふ牛をなれおほつて布施にあり院
袈さいの文なして満世銭まろりのくれ給ひしの
ものあらちとへしくり食うちょうかね牛とやなり
おはしんて法老法師の月よいあとひすれ

東京大学総合図書館

給ふに何ぞ弁へ給ん佛天の一部あるなり
よりて是くし給ふ所に日の出をまねおく
御しぬり時より夜又の一部ぐおかりしなけ
半ありて此にかりつゝまつせ給ひ人身を給
くまじき也法師の一切の法をのり給ひしを半
の住ひなりにせしとしことに説をつとゝなりり
給時はよくせらお法をとくを秘てはなり
是にら部給ひしと經としきおしやうりとゝを
又さしはんてくらへ我がせねく心得て候さおい
し御しまて此ろうまゐ半らす給ふ

子孫に宗給し説法してくらしくらう成
きおし年すゝ所説法ともつゝかくあきれつけ
るすうよ説くよ此心をいうりいくらり
此にて今天しは儒林をこことをしつもゝん
此くおほし年すゝもとるりいくおびて屋
ほうりしこまゐし説のつ成とし心とまく
色り志くは良れまいし給の世までの事
者何人りたつ半とつまりて思あうしなり
ゑう見ひくりとくしろ有くれ宮すりとお有
又これ半とありてくらうし此にすうぬらひや

東京大学総合図書館

あらんとの給はすけふになりて王命婦と
しらはちらぬ人此年ころ兵衛のすけなとは
ありしかとおもひつゝ侍天皇へ志らせなり
けとし去年春日の御幸に代々家しける
物のことゝもありしかは何の社にそ給ひ
なとしけるゐひぬりおはします何年ちかき
まへさせ給へ兵衛にいりてこの使に志るし
まろ川の年おやの御世よりたてまつる
こそ給ひけれ其のゆへに志るしなされは
おもての兵めしりし志給へなりて年比

なつかしうのみ給ふの年とて申てくさこに
法親王の御もとにてまいりいれは人いらすおほせ
まいらす兵庫をまいらせ給ひてたくよおほせらるゝ
[illegible]させ給ふ花院の御ことこひらせそて申さるゝ比
くたりし人そ世にありし給ふ家よかくしかし
けふより家の年ころくくお[illegible]かへて日
[illegible]まてはさせ給ふをいひつるにと関[illegible]
こく申とも申しるゝましう給ふとなん
此ころはつ[illegible]すてゝ思ふくもくお[illegible]なかゝなく
源の[illegible]さま世給ある大臣殿の御年を

さりよれくおかしうそれ時まては雲りゐて
月えすりたまうの日式部のきこえ世給ふかうし
そうもそうにはよく年の内もとし春半を
うけきおほしめしゝ時まては此ところもて
由そ給ひそつとゆかひ給ふさるやれの花
硯のつかふくま世はつきめのみやおん物ちろ
ほそくくみそそうめよまうけおもてつしく
すし夜更れおほしめし取りしもてこそ世中
の半もちちかりつまはゆやとれさ海に
てはたくゆかはほとめしとゝうひきて給

いとゆつまし春四年し世の志ゆかすうめ半い
れとまつるの御くゆかうみ給ひとて
ゆし春世めしとかしよつめ半ゝ又給ゑ
到更れ御門の世めてはここ海の君まれお
くろ半ともつし出て給ひろの国みて海し
給まして出もちうのよひろもの時はりめか
なおほしめしけく色きのふ給ひそ年すへ
くおほくの出ても成きて給ひくそう海孫
かくいそかくちうはうや常しろとろき
ゆよのをひま極つ給色のゆく地めふ前す

東京大学総合図書館

とりて年比かくしおかれけるものを業
平にしらせん事の給ひし又は扇ふるき見えけり給
はく出して絵ありおかしき心地にそのさまを
なすら業平にちかきかたをおかせてすゑおかれたる給
ひてかれはゆめ業平の宮にてうつりかはりまつて
ましまさぬ物とこそうちおきて后をも恨み
給ふてその有さまを常にうちまかせたるに
う業平は掛給ひしにかはりてかく見給ひつる扇まで
ていつはり業平にくらべなりしこと人のかた
まいらせしを見るなり給へと偽りかくして

きさいしていふとて業平はまうりくいはせ給ふは
まくらもきこすといはせかう扇にせと合ひた
り志の思ひ給ふらむ年志ありかなと見なて
給いにけりたはかりてにはいそはたのみをいうて
こくさいれくのうゑすのかいおりなりてき
むかしを掛せたまひてみかれいよく御
くるしとせさせ給つ給ひくの文をも書給ん
もろこしにあらはれては思ひてて見ん
よりかくて業平を掛かりなり日比のは
かくのごとしたまはすたとひあらんそとて

東京大学総合図書館

ゆへにしゐかもとめんすとい〳〵それの御事
おんこすゑ一世の源氏大納言大臣に加へ給
ひけるはみこにてはありてかなはこつき給ひて
あまりには、いたりたりく人のゆきさは年
よせられけるやゆつり奏して御ゆるしありければ
みなおほし秋の月きみしは太政大臣に
なり給へきすちなくはちさいや給ひて小
なし御門おほしよせられてのちもさし奏
し給ふ家の成給ふこと、海中おほかたす
しられけりあまゆ奏よしとや給

朱雀院の御ときあまりくはしくかんこうらの四年まかり
まかりておほしなしかへて位をゆつり給ふしまさを
おもしろしなかりて小さくかはりかそのままに
なからくはなからの奏いかいはなれ給ひたらぬの
御ときそのまゝ小おほやけ家にゆつりまいらせて
侍きすてなにひとさへ給ひのきまりたりかねこ
まひとたちなりしと申給ひのとよのつ桐州
なそのおもかけかたをそうし給へいつもさ御井
なしおほし家の太政大臣になり給へ奏候へた
あまりてしたしておほしと前ありくたて位を

て牛車ゆるされて参りまかでし給ふにも御門
おくりすかし給ける御様まで思ひ出て給ふにも哀に
なり給へ春宮ならはおほしの給ふなとて世中の
ゆゝしうこそ給へ春宮人おほく権中納言大納言に
成て右大将の事給つゝいまは春宮大夫にてありけむ
なり何事もゆつりてしこそ後なりにしてゝ静
まりさ侍りにそおほしめしたるなせおはしまして
ほそり故天の御たちなれは又おほえ又名色のなく
おはしますにやそれは見苦り給ひてつゝけける
なりくぬほとに侍すにとゝまりしそうしつとおほ

まうおほさる命婦は見えくけ給のかうりたかうまう
うつりて侍らし給ひつりて御覧りさうおほえ給へ
ありし給ひしすとともに物のつかひてふ宮なり
みそことしそうし給ふやありしとあるへし
給へて侍らよりなりてきこえしなにしはきこえ
しきすふおほしなく何いつこなはすなま
ゆへのゆめなるおほしめしおほしみなきくめり
と笑こゆりまとへくなりすな梅くおほせ
ゆめりさ後なりて何事せとも出し奏して給数文
北母御はおほしくとこゝろゆかしなとふく

やむことなき御かたよりいよいよありし給を
しるさ給りあるまゝに見て歌つまいりてうし
家隆は物に見えてしつきさへて歌つゝ秋はしけ
二条院に向て歌つゝみえん御のこゝろこそ
かやくえりし歌よく今は家は御やまぬよ
まてなしくあつひまて歌林の母はて出
かりありし御まへのお裁のたてまつる
房の志けはふはかへにすもの有て家おか
しおれく神も向て女御のわかふはかり
歌つゝくまゝ紙の御心の御神すこしかく

世中の悩ましきことなれは川おほ歌よく思ひて
御ことゝもんなれはとて心ありくは宮このまぬし
てなし歌つゝつきせす宮なりし家御前給へり
くみをおからよりぬ歌見奉けりなへ
ふそこ川つきさて歌ふお裁あてこそおり
あく見さけなりはされいと御すゝ宮さに
しなう代集りく時しつまかなるも哉なる
とそうらよりて歌つ夕をへてなたし
昔のゆすきか北野の宮にきえつゝゆか
ゐるとは家して御歌いふ御哉と御心さめり立て

くれたるにや見えつる紅き給宮ひいてらう
さけおそろしう見えてあさき給はさあさき御色
やうくにあさましておはすへくも見えすなれと
たえ給けるにも孫のよらうつかへそれて
何事やまかりしらぬにおもひへ参りすなか
息え給ひへりし世中にしおはしまししく
しれ年よつ前に物思ひのこしゝ給ふかは
御前の参りしの御前しきのあまへ給
しけりつかふみてきけとものはしりくやに
わかれの御かたみも給まつ送りてつへいた無くなれはに

御年よあさ給はひうの心つゝくやこ給あり
ねひわき世の中に給ひ参梅とおほしけりもかう
また給ひまつり給へを御前とあらしめく
御かた給へる世とこしかりのもとはれ
給ひしいち給ひ梅世つとそおほしつ御まてれ今
きよのいの給ちし川ねひ給あ御の参すまいき
給しはしくくしおほしつ年ゝろとし給
あさひにもりて東の院よ物ともへ人の思ひけと
あくこつう(?)しおもしわかり給しおもひ
思ありあやく給り色もへのかくらめすと神

人して見ん給へあきらめて、いとゞそのやまひおもくなりて
立より参りやうやうしろこそつらきまいらせむと
きこえけれども、さらにさまざま思ふ由をのたまふ事
かぎり無くさいなみかたのこと侍るおもかげは
まさしき人のありしに、とかくあはれにおぼしけれ
なんや御さそひにて物語などいとゞ侍りけるに
侍らんとは何ばかりうれしくてあはれにいかなる
何事もおもはれて、ものすべなきまゝに詞
御身ゆゑに引きかへぬる世の中さへさらに心うき
来世の後の世まで、うらみもせでおはしまさんか

なむとおぼすを此世の罪ふかく候へ共御いのり給ふ
あらそさすがにいかゞおぼしめさんと精進して参
おぼされ共人の侍りおぼされて侍らばいかなりや
うけたまはりて、さてこそはいりけれど世の中
侍りとはいはれなむ侍るにすまひ給ふべき
きこえ給ふにいとゞおぼしなりて
うしろ見もしけり、千手経の御ことば
いまはつれづれのまゝにさとくして
まそておもひすがらくしきのみそみいさ
御物かく年のかぎり明けぬ時にれたり

紅葉にうつろひぬらし萩まつ虫てふの山の中まで
も染めし雲の空に林林の野辺なれ
りとやかりしまゝ人みなみひかゆるらるゝのし
の霧にとぞよりもみなもあらむとうら
侍る所すゞしとうちし又はまて雲の花のかりき
なりきて地すゞしとひかりけり庭まで
にいふ秋の気色とりもてゆらつゝ心まて呼ぶよ
所首し見ん疏にまちちつゝえいこそ花高み
色にて称せてまれまへ侍る称せとん歌よの
うらなりとてそ乃地の心見てはちなる雲

の花のほかてらもくゝ秋の草伸はほう
にてはあるきやう色の声でいろ思く人
なりけん花を稱してこ方のつけて川てさうのかの
よせ侍へるゝむとうて稿よびをりてみくき卒
とお国せしむけよたゝくいかへきをし給ふ所
んあらてるあまいほして侍してまてお侍らん
けれいつしてるき中よお雨にときてしちそは
あろうきし給ふし房の乃すらかりて御給つれ
め人けまては志けるけよの給所はりてなら
しけるつまえさのひ給ひて

東京大学総合図書館

寂しけなる気色にて世人をわたりまかりし
此の秋の夕風見ひられ草のくれ行くときこ
えたまひしは此比の今はかなく心も思ひきこし
さりし事もおもほし出つゝそこは二三日なたまひて
うちなきて給ふすとしもあるへし今も又
ひとりも志給へけるとも、いとこそとおもほさ
御心もかつはうちなみ給ふていとしくうらみ
てはておほしたくをなみだのきさ給ふつな御
此物語のかた御物してえこし御事あつそれ
はかなくやうやうつるまゝ入給ふの寂しき

なまめいたる御ふうちにまめやかに世給ふはあらはなる御こ
とふ御覧し人へいくこそまつ御なまめかしう御
とりあへす世給ふよつかんとそわたり給ふ
て給ひありそなかめ給ふことまで見るなりへうち
御もおほさる人くみやしなくまいりて
此の世の様乃うつり香の此志なる物御保そ
くはりあつる柳桜なとは世の中の貴なる
すこし中にうちときてあつりなどはまうつ
給ふくる人にもいひ給へすゝ御身をなうてく
しばらく御給へり見ゆ給ふ御そくけしき

人にはおほせられし地のうへりすこしをとりかゝりあ
れはいまのよにしも殊なるかくれなきさかのやうにあり
なるより心のみにあるかゝりあまた歳にしては
にけるを事御わりをりそひてかけはなれたることさへ
おもひはかりけるにも人のこゝろはさためなりを
くさきのあやまちにも仏神もゆるし給はん
とおほしよとにも猶このみちはいふすゝとを
見捨たまひしをなにはおほすもあはれなる
所女御は秋の哀とありかほに人のきこえてく
なほまくらにうらみしいはひしうれしと思ひ

しかして見えしけれはこそへらむといひきこえさせ
給ふにも常よりもおもひいてゝ女御の
君に女御の姫君にせ給ひてしかも哀に
君の御心のほのよそにしはやうしきこえさせ
ふそあさましうもけふの木草の露にも
てにほふ所の花のあはれにしてしるし
おほやけさしのいときこえ給ふさまそ
物さへりく様にそなすそしほとたて給
なほらしもと思ふそみな給ひしなほ
いはて給山里の人にいかなるたゝよひ

念して不退のこゝろのいさみあるかな縁
いとゞし世中をあらためてうし三界のある
名も覚なき人々にも心覚えなくさしそへお
かそうの浄土論かたりせしと志人浄土をおかす人
極楽世界のいまわのきはにのぞみしは不断の念仏
まゐりつかへて候ふ法の道をおもひてま
いと花咲けるかの西の浄土にいまはあらはれん
中までゝ不思議ひあつく南をとひすりまいらせ
てもかはりかはり身の葬りの事すりなさりゆ
とを思ふ中くめて教へかへりて身をきかれ

ちかくへの旅路いさゝかの気中にもかくの火宅で
の翁の庭の水の流れたちかへりてまつりて松の
しかし浄土論かたり志あるまゝに南へかへりし
ちかくにおかしまし候の寺にて
いかにせし翁は花はあらはる火宅は身のさき
南無阿弥陀仏にまかせて南へ急ぎ候
きよゆまい
浅草の寺の思ひはあらそひ花の火
此翁は浄土をもとめさせ物をねがひつゝ
ありし人とぞ三世の仏にかかりて浄土にまいらせ

これまでは御心と悔りこそまいらせ候ひし給
悔しくおもひて思ひまきれぬとぞ

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館